

Title	「八・一南昌暴動」に関する四文書
Sub Title	Four documents on the "Nanchang uprising, 1927"
Author	石川, 忠雄(Ishikawa, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1963
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.36, No.10 (1963. 10) ,p.67- 84
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19631015-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「八・一南昌暴動」に関する四文書

石川 忠雄

一 解 題

一 ここに紹介しようとする「南昌暴動」（一九二七年八月一日）に関する四つの文書は、中国共産党の機関誌「中央通訊」に掲載された、(一)中央通告第十三号「為葉賀失敗事件」、(二)李立三報告「八一革命之經過与教訓」、(三)「張太雷報告——八一事件之經過失敗原因及其出路」、(四)「張國燾報告」、である。

「中央通訊」は、一九二七年七月の武漢での国共分裂後、国民党のはげしい弾圧のもとに非合法出版物として刊行された中国共産党中央の機関誌「中央通信」の後身であるといわれている。中央通信第一期は、一九二七年八月十一日付で創刊され、その後第六期までは確実にこの名称で刊行されていたが、第七期か第八期からその名称を中央通訊に変更したものと考えられている。

ここで紹介する四文書が中央通訊に掲載されたものであることは確かであるが、中央通訊のどの期に収録されたものであるかは、正

「八・一南昌暴動」に関する四文書

確には明らかでない。これは、まことに不思議なことのようと思われるかもしれない。しかし、それには、つぎのような理由があるのである。

昨年夏、わたくしは、東京でコロンビア大学東アジア研究所長マーティン・ウィルバー教授と面談する機会をもつた。同教授は、アメリカにおける中国研究の著名な学者であり、わたくしも以前から親しい関係にあつたので、教授が台湾で蒐集してきた中国共産党史に関する資料についてその詳細をただしたところ、教授はその際に中央通訊の筆写原稿（欠号あり）をわたくしに示し、その複写と発表とを承諾してくれたのである。ただ遺憾なことに、わたくしの複写の際の不注意のために、複写したこの四文書の掲載された期を現在正確にたしかめることができない、ということになつてしまつたのである。しかし、その点がある程度まで推測することは可能である。

前記四文書のうち、「中央通告第十三号」と「李立三報告」の二

つについては報告に日付がしめされていないけれども、「張太雷報告」には「十月十五日南方局省委聯會議席上において」という但し書が、「張國燾報告」には十月九日の日付が付記されており、さらにこの四文書がいずれも同じ期の中央通訊に一括して掲載されたものであることは確かであるから、おそらくそれは、中央通訊の十月もしくは十一月刊行の号に収録されたものと考えてよいであろう。大塚令三氏の文献考によると、中央通信第六期が一九二七年九月三十日の刊行で、中央通訊第八、九、十、十一、十二、十三期は十一月中に刊行されている。したがって、これら四文書は、中央通訊(？)第七期から第十三期までのいずれかの期に掲載されたものとみてよいであろう。もつとも、第八期の内容は、中央通告第十、十一号、北方局に致す書、江蘇省委に致す書および福建・四川・湖北・山東各省委に致す書などからなっており、第十一期は「湖北秋收暴動專号」、第十三期は「中央委員会臨時政治局擴大會議特号」になっていること、ならびにここで紹介する四文書の一つが「中央通告第十三号」であること、などを考えあわせると、第九、十、十二期のいずれかに収録されたものと考えなければならないであろう。

二 前述したように、この四文書は、いずれも一九二七年八月一日中国共産党によつておこされた南昌暴動およびその後の南征に関するものであるが、その意義に言及するまえに、一応南昌暴動に直接関係ある当時の歴史的背景をみておくことが必要であろう。

周知のように、一九二四年一月に正式に成立した中国国民党と中国共産党との第一次国共合作は、一九二七年四月十二日の蔣介石に

よる四・一二上海クーデタを経て、南京・武漢両国民政府の対立をまねき、さらに武漢政府内部における国民党左派と共産党との関係も、農民運動の問題を一つの重要な原因として、しだいに悪化していった。その結果、武漢政府は、七月十五日いわゆる「分共會議」をひらいて共産党との分裂を決定し、八月五日には共産党取締令を、八日には譚平山・向忠発等共産党幹部の逮捕令を発して、共産党に対する弾圧を開始するにいたつたのである。

中国共産党は、このような国民党左派の動きに対して、「武漢政府の革命的役割は終りをつげ、いまや反革命勢力になつてしまつた」という認識のもとに、共産党員の武漢政府示威退出を指令したコミンテルン七月決議——「中国革命の現在の瞬間にかんするコミンテルン執行委員会の決議」——にもとづいて、七月十日頃から武漢政府を退出しはじめていたが、十三日には対時局宣言を発表して武漢政府および国民党中央の反革命性を攻撃し、一切の革命分子と協力して革命を推進する意思を明らかにした。

これとならんで、中国共産党は、「中国共産党中央委員会の日和見主義的誤謬を是正し、党の指導部を政治的に健全にするための方策を講じる」というコミンテルンの方針にもとづいて、八月七日漢口(一説には九江といわれるが、当時の政治・軍事状況から考えて漢口説が妥当であると思う)に中央緊急會議を召集した。この會議は、コミンテルン新代表の指導のもとに、中国共産党中央臨時政治局常務委員会の召集したものであり、瞿秋白によれば、この會議の召集は、コミンテルンの電報による指令と新コミンテルン代表の指導に

もとづくものであつたといわれている。会議は、中央委員十二人、

候補委員三人、中国共産主義青年団中央委員五人、地方代表二人が出席したといわれ、瞿秋白・李立三・向忠発・蘇兆徴・毛沢東・鄧中夏などは出席していたとみられる。したがつて、この会議は、その構成メンバーからみれば、当然党の正式会議といふことはできないのであるが、「反機會主義闘争の緊迫と党路線変更の重要性」からみてやむをえないものとして、この会議に正式の権限をみとめることとしたのである。

この八七緊急会議は、「コミンテルンの指示にもつき、根本的に従来の機會主義の誤りを矯正したものであり……あらたに革命の大道を前進させた」（中共六大会決議）ものであるとして、中国共産党によつて高く評価されている会議であり、その決定としてもつとも重要なものはつぎの四点であつた。

すなわち、(一)これまでの指導者陳独秀の革命指導は、「民族解放運動と階級闘争とを対立させ、階級闘争の發展は国民革命を破壊する」との立場にたつて土地改革・労働運動、軍隊工作など革命的諸政策の実行を怠つた右翼日和見主義であるとして、その清算を決定したこと、(二)民族ブルジョアジーと小ブルジョアジー上層分子とが反革命の側に移行した新情勢（国共分裂）のもとにおいては、土地革命を実行し、「系統的計画的に且つてできるだけ広い範圍で農民の総暴動を準備し、本年秋の收穫期を利用して農村における階級闘争を激烈にする」ことが絶対に必要であることとめたこと、(三)共産党系労働組合の維持發展および労働者の日常經濟闘争の強化とならん

で、労働者を武装し、軍事訓練をおこない、武装暴動によつて反革命政權を転覆し、革命政權を樹立することを決定したこと、(四)機會主義的指導の影響を一掃するため、六大会召集まで中央委員会の職權を代行する中央臨時政治局の設置を決定し、瞿秋白を総書記とし、李立三・向忠発・周恩来・李維漢・劉少奇などによる新指導部を形成したこと——などがそれであつた。

(1) 波多野乾一氏はコミンテルン新代表をロミナーゼ (Beas Lomihake) であるとしている（『赤色支那の究明』四五頁）。これに対してロバート・ノース教授は、当時コミンテルンから派遣された代表はロミナーゼとノイマン (Heinz Neumann) の二人であり、前者は南昌暴動の指令を携行し、後者は八七会議を召集したと述べている (Robert C. North, *Moscow and Chinese Communists, 1953, p. 110*)。

(2) 瞿秋白「中国革命与共產党」一一二頁。

三 南昌暴動は、このような事態を背景として、一九二七年八月一日、中国共産党によつておこされた武装暴動であつた。この暴動は、中国共産党の革命運動が国共合作に象徴された革命的諸階級の統一戦線の時期から、いわゆるソヴェト革命の時期に転換されていく第一歩をふみだしたものであつて（ソヴェト革命への転換は厳密にはこの年の九月十九日の中央政治局會議で決定された）、この暴動のなかには、このような転換期における革命運動のもついろいろな特質があらわれているといつても過言ではないのである。この意味において、南昌暴動をはじめとする一連の暴動が中国共産党史上にもつ意味は、重要であるといわなければならないのである。

これらの事件については、こんにちまですでに若干の労作があらわれているけれども、その研究はまだ決して十分であるとはいえないように思われる。ここに紹介しようとする四つの文書は、これまではほとんど学界に紹介されなかったものない貴重な資料であり、南昌暴動およびその後の南征に関する党内外の事情、さらには当時の革命情勢に対する党の判断をしるうえに必要不可欠のものといつてよいように思われる。わたくしがこれらの文書の紹介を考えたのは、主としてこの理由によるものである。

前述したように、これらの文書は、コロンビア大学マーティン・ウィルバー教授の御厚意によつて入手できたものである。ここに同教授にたいし心からなる感謝の意をあらわしたいと思う。

二

A 中央通告(第十三号)

(為葉賀失敗事件)

(二) 葉賀南征の経過及其失敗

南昌暴動後、葉賀軍隊從南昌經過撫州、瑞金、会昌、遇見錢大鈞的及一部份黃紹雄的軍隊、与他們大戰、結果、南昌暴動軍雖然受了很大的損失、但是也打了很大的勝仗。会昌之後葉賀便未照預定計劃直下尋鄔、到梅県、竟改變途程折回汀州上杭一帶、再經大埔一直往潮汕去。但是等到葉賀軍隊到潮汕、敵人方面陳濟棠、王俊、黃紹雄已從四面合圍來攻擊。

葉賀軍隊雖然在九月二十四日先鋒即到汕頭、汕頭工農軍也起來暴動、然而到九月三十日即被反動軍隊所逼、不得不拋棄汕頭、而竭全力到湯坑去禦戰。這最後一次戰鬪、敵人方面有一万五千、我軍只有五千、巷戰一晝夜而我軍竟完全解体。現在的情形是：二十五軍(師?)一千余兵因到汕頭時尚留駐三河壩、不久即被敵軍隔斷、現在退向閩辺。湯坑之戰敗後、葉挺只余七八百人退甲子港而潰散。尚有賀龍二十軍之一二師二三千人奔往海陸豐、這部份的軍官政治意識本甚模糊、離開大隊之後、更是絕無目標的情形、竟要求李濟採取編

(三) 葉賀暴動失敗後之政策

南昌暴動軍的失敗、誠然是中國革命中的一個失敗——工農武裝暴動的開始時期、革命方面所有的這些正式編制訓練過的軍隊、不但不能征取廣東發展土地革命、而竟潰散了一大部分、這誠然是一個很大的損失。但是武府反動後、中國革命進到一個更新的時期——工農民衆暴動的時期、葉賀軍隊的革命戰爭、不過是全国民衆暴動中的一個強大的副力。這新時期中、我們的主要政策是組織民衆暴動、贊助民衆暴動、葉賀的南征、不過是這總政策之中的部分問題。我黨這個新的武裝暴動政策、完全是合於革命發展到新階段時客觀上所要求的。只要看看九月初直到現在、湖北的通城、通山、崇陽、咸寧、蒲圻、公安、石首、松店、江凌等県、農民甚至於徒手的暴動起來、組織工農革命軍、佔領県城、革命民衆自己選出県政府、鄉村之中實行一切政權歸農民協會、沒收地主、殺戮豪紳……湖南安源的工軍和農軍暴動進攻醴陵、株州的農軍以一支槍奪取株州、平江瀏陽的農軍曾

同時暴動佔領縣城，長沙四郊的農民也起來暴動，廣州則自四月十四李濟叛反動後，四郊暴動起來。但要這種情形，但知道客觀上革命的發展，的確已經到了一般工農暴動的時期，我黨的責任，便是組織和準備以及贊助指導這民衆武裝暴動，在各地率領民衆起來推翻新舊軍閥豪紳資產階級的政權。在這種總暴動之下，葉賀軍隊自然有很重大的意義，但是，革命的基礎力量始終並不是葉賀的軍（部）隊，而是工農群眾，現在葉賀軍隊固然失敗了，工農民衆的力量還却正開展，對於武裝暴動奪取政權的必要之認識正在與新舊軍閥國民黨的劇烈的鬥爭之中，日益廣泛而深入於工農群眾——不但在兩湖廣東是如此，現在江浙北方予陝……差不多各省都有如此的現象。這種情形之下，難道葉賀軍隊一敗，革命便了結了麼，當然不是的，葉賀的失敗僅僅是軍事上的失敗。葉賀的軍隊可以給敵人打散，工農民衆的力量並沒有打散。我黨準備組織發展工農武裝暴動的總政策，仍舊應當積極的進行。

因此，現在廣東雖然已經沒有立刻以大軍攻取廣州奪得全省政權的可能，然而廣東各地的農民暴動仍舊在發動，葉賀所剩餘的勢力應走「到農民中去」幫助當地農民摧毀豪紳的政權，建設農民群眾的政權，引起農民群眾自動的起來沒收土地……武裝農民，組織工農革命軍，葉賀所余軍隊自身要改組變成工農革命軍。

（四）葉賀南征中我們主觀的錯誤

葉賀軍隊的南征，何以竟至失敗呢？固然，客觀上敵人的軍力比我們強大，全中國的報紙交通整個的權力都在敵人手中。然而失敗的緣因之中屬於我們主觀上的錯誤的亦是很大：

「八·一南昌暴動」に關する四文書

一，前敵委員會政綱的錯誤——主持葉賀南征的我黨指揮機關，前敵委員會決定政綱之中，關於土地問題提出「沒收二百畝以上的地主土地」的主張。這是非常之大的錯誤，這證明沒有土地革命之決心，這種政綱可以使葉賀暴動根本上喪失其意義。廣東一個農民聽見這一主張便說道：「這叫做耕者無其田」！這句批評是再正確也沒有。

二，策略上的錯誤——葉賀南征軍所到的地方，對於豪紳資產階級所採取的策略，並不是猛力摧毀他們的組織和政權，都大半偏於猶予妥協的策略。並未猛力殲滅土豪鄉紳，並未完全解除他們的武裝，摧毀他們的金融機關，摧毀他們的交通聯絡。不敢堅決的實行沒收徵發的政策，却用軍閥籌餉的老弁法，和他們和平磋商。對於豪紳是如此，然而一到汕頭，對於乘機稍稍搶掠的貧民，都立刻槍斃了三個人，「為的是維持秩序」——那是還是維持的豪紳資產階級的秩序！廣東有一個工人說：「這是蔣介石第三的軍隊」。這就是說：這次來的軍隊還非工農貧民的軍隊，並沒有大大殺滅豪紳資產階級的權勢與勢力，（葉賀軍隊之中「不擾民」的口號幾乎高於一切）。

三，政權認識上錯誤——「耕者無其田」的「蔣介石第三的軍隊」到廣東做什麼呢？要創造什麼樣的政權呢？當然，帶着這種政綱和策略的軍隊，對於政權不會有明瞭的認識。沒有預備去建立工農貧民的政權，沒有深切覺着自己應代表工農貧民去行使（政治）權力。却只要「繼承國民黨的正統」。沒有信仰群眾的力量——群眾的革命獨裁的力量。沒有在群眾之中去創造真正自己的軍隊和政權的力量，而是想像着自己是一種軍隊的力量，類似於孫中山的大元帥府，國民黨的國民政府的力量。因此：一，可以亂發委任狀，聯絡雜色軍隊土

匪首領；二，可以派人與張發奎談判，弄些縱橫捭闔之術……

四，宣傳工作上的錯誤——葉賀軍隊行軍的時候，兵士之中並沒有做充分的宣傳及政治工作，所過地方的民衆之中也沒有宣傳。同時，敵人的宣傳都非常之利害，軍隊行過撫州之南，差不多十幾天不見一個人，這是因為朱培德等反宣傳的恐嚇當地居民的緣故，我軍却没有先行派遣宣傳，說明「八·一革命」南昌暴動及南征的意義。

五，軍事上的錯誤——軍事上的錯誤，更是很多，不能詳細敘述，簡單些說：南昌暴動沒有採取直下贛州吉安，一則可以打散朱培德錢大鈞隔絕張發奎，使他們不能與李濟陳黃紹雄連成一片，而如現在之從容布置，圍攻我們，二則這條是大路，沿途農民運動有些基礎，可以隨處摧毀豪紳政權，引起農民群眾建立農民的政權，實行土地革命，武裝農民，逐步交農民防守。南征的路線是取得撫州會昌尋鄔等閩贛邊境荒僻之地，農民簡直尚未起來的地方，這已經是一個失着。然而這還可以說，僅僅是一種可能，最明顯的是：一，開始便有與張發奎妥協之等待猶予的傾向；對於不穩的部隊，如蔡廷鍇部，採取非常軟弱的搖動的政策，致使蔡廷鍇得以詐術損壞我軍很多很好的部隊。再則，現在瑞金，會昌打了勝仗之後，又不追蹤南下，直到梅縣，匯合當地已經奮起的農軍，發動當地農民暴動，擊散黃紹雄等敵軍，直取興寧，五華，佔領全東江區域却又折回走上杭汀州，與敵人避道而行，使敵人得以騰出十多天的工夫從容布置。

總之——前敵的指導，在政治上及策略上並未能真正代表工農，既沒有明顯的土地革命及工農貧民政權的政綱，又沒有堅決摧毀豪紳政權的策略，——工農說是「耕者無其田」蔣介石第三

的軍隊」。這種機會主義的指導之下的軍隊，如何能責備農民群眾不起來援助，農民對於這種軍隊自然是不會出力贊助。事實是葉賀軍隊根本不去發動農民群眾——前敵指導，只知道軍隊是主力，「革命委員會」是政權，根本上不信任群眾的力量，不去發動農民創立真正的民衆政權，因此將富有歷史和偉大的意義之「八·一革命」，變成僅僅是投機的行動。這是一切錯誤的總錯誤。總之，此次失敗，並非農民未贊助軍隊而失敗，而是軍隊未發動工農群眾，甚至反而阻滯民衆革命鬥爭而失敗的，（例如普寧農民群眾數萬圍城攻豪紳的巢穴，軍隊去幫助，打進了城竟反而不准農民進城，不准農民大殺土豪鄉紳，說是維持秩序）。

六，南方局指導廣東農民暴動的錯誤——南方局指導廣東農民暴動的政綱戰術上的錯誤，中央早有信去指正（見中央通訊第六期）。葉賀軍隊與廣東農民接觸之後，尤其見得出：（一）政綱和口號上拘泥規定五十畝以下不沒收，另提減租至百分之三十的口號；（二）戰術上農軍只取側面攻擊——僅僅作幫助葉賀，牽制敵人之計，而沒有

號召農民群眾自己起來奪取政權和土地，因而沒有猛力搏擊的戰術；（三）根本上沒有發動農民群眾，所謂暴動，大半是，或是完全靠已經組織好的農軍勢力行動——或為純粹的軍事行動，而不是農民群眾的暴動；（四）地域上海南及高雷雖起，而無閩大局，西江方面簡直只接洽有槍的零星部隊（農軍或土匪）沒有到群眾中去号召，因此這地方始終沒有暴動，黃紹雄部隊遂得安然渡過；（五）既沒有把廣東農運動做主力，又根本没發動群眾，所以使群眾之中發生等待葉賀的心理。自然，一般工農自己沒有深切知道要自己起來奪取政權——這

是政治宣傳之大錯誤，就是各地黨部也沒有詳細考察反動勢力，作種種奪取政權的準備——這是技術工作上的欠點。

B 李立三報告

八一革命之經過與教訓

(一) 南昌暴動

七月十九日我和中夏同志奉中央命令到九江，譚平山同志亦到。當時在軍事上四軍十一軍已向南昌移動，駐紮於馬廛鎮塗家埠一帶，二十軍已漸次集中九江。朱培德之三軍移駐彰樹，九軍移駐臨川。程潛之六軍經江西之××萍鄉分道向南昌集中，有包圍我軍之形勢。在政治上武漢政府已完全反動，唐生智正在積極屠殺我黨，汪迫工農運動。汪精衛已完全投降於唐。張發奎態度雖仍表示反唐，却已深受汪之影響，高唱擁汪，並表示對我們不滿，有「在第二方面軍之高級軍官中的C P份子如葉挺等須退出軍隊或脫離C P」之表示，軍事上已到了極嚴重之時期，而張尚徘徊於武漢，則張之不可靠，更可証明。同時湘鄂農民運動雖受嚴酷之摧殘，仍繼續不斷的在各處武裝鬭爭，城市之工人亦在繼續鬭爭。當時黨的政策，正準備在秋收時期号召廣大農民暴動，在武漢亦正在準備作反政府的大示威。所以就當時形勢，「南昌暴動」已經是我黨必然應取的政策。不過我們動身時中央並未給我們準備此項工作之任務。因此我們到後，第一次會議（懋トル）覺到張發奎態度之猶豫與右傾，那廂依靠張為領袖之回粵運動，很少成功之可能，甚至為三六九軍所包圍而完全消滅。縱然回粵成功，我們亦必在張江（汪？）協謀之中而犧牲，將與我們回粵去号召農民暴

動，實現土地革命，建立新的革命根據地之目的完全相反。所以我們應當拋棄依張之政策，而決定一獨立的軍事行動，逼迫張朱與我們一致。（當然當時這種觀念還沒有脫離機會主義，）因此決定在軍事上趕快集中南昌，運動二十軍與我們一致，實行在南昌暴動解決三六九軍在南昌之武裝。在政治上反對武漢南京兩政府，建立新的政府來号召。在這次會議中沒有不同的意見，遂將這項意見報告中央。我與中夏即赴廬山和秋白商議，秋白亦完全贊同此項意見。當時聞中央有召集緊急會議之訊，請秋白代表在滄負責同志之意見，並請中央即速可決。越二日形勢益緊張，張發奎尚未到滬，態度更右傾，並聞將有廬山會議，來實行解決在第二方面軍中之C P，同時平山已將在南昌舉行暴動之計劃，探賀電之意見，賀表示甚為熱烈。因此更有進一步之決定，軍隊於二十八日以前集中南昌，二十八日晚舉行暴動。並急電中央徵可否？當時我尚在廬山，得中，平，代英等電召即返滬，參加會議，此次會議對暴動計劃完全一致。在政治上決定組織中國國民黨革命委員會為集中政權黨權軍權之最高機關，以反對寧漢政府中央黨部，繼承國民黨正統，沒收大地主土地，（次項決定在此次會議上有很大的爭論，至第二日恩來同志始完全決定）實行勞動保護法為暴動之目的。在這項綱領之下發表宣言（用國民黨中央委員聯名義）第二日恩來自滬趕到，報告中央意見，認為形勢既已於是，對在滬同志的意見完全同意。遂積極進行軍事之準備。並由中夏同志將詳細計劃回漢報告中央。我們遂於二十七日齊赴南昌。正式照中央命令成立前敵委員會，當時因軍事的準備來不及，遂改定於三十日晚舉行暴動。二十九日早午，連接特立同志（即張國壽）自滬發之兩密電，謂「暴

動宜慎重，無論如何候他到再決定」。當時前委決定：暴動決不能停止，仍繼續進行一切。三十日早特立同志到南昌，當開前委會，特立報告中央意見宜慎重，國際電報如有成功把握，可舉行暴動，否則不可動，將在軍隊中的同志退出，派到各地農民中去。所以目前形勢，應極力拉攏張發奎，得到張之同意，否則不可動。當時，恩，代，立，湃，平都一致反對項意見，謂暴動斷不能遷移，更不可停止，張已受汪之包圍，決不會同意我們的計劃。在客觀應當是我黨站在領導的地位，再不能依賴張。爭論數小時因特立係代表中央意見，不能以多數決定，故未解決。到三十一日晨，再開會議，又再論數小時之多，特立最後表示服從多數，始決定於是晚二時舉行暴動。是晚因二十軍某營長洩漏秘密，增加行動時許多困難，至翌晨六時始將三，六，九軍在南昌之部隊完全繳械。

(二) 軍事計劃與回粵之經過

暴動之第二日即成立革命委員會，在革命委員會之下組織參謀團主持軍事計劃。關於軍事方面自南昌至汕頭有多次之討論，其經過大略如下：（我沒有參加參謀團和黨內的軍委故僅知大略。）

A，關於回粵路線的討論

關於回粵路線的問題當時有兩種意見，一種意見主張由樟樹，吉安，贛州，取道紹（紹？）閩，沿粵漢路直取廣州。另一意見主張由贛東經尋鄔直取東江，以為是此路線可以避免敵人之攻擊。並且可以很快的與東江農民暴動聯絡。當時俄顧問（紀功），恩來及參謀團同志都主張後者意見，只有很少軍事工作同志及一部份非軍事工作同志主張第一種意見，所以結果遂決定取道贛東取東江。

B，由南昌至瑞金

五號從南昌出發，經三日趕到臨川，天氣極熱，沿途多係山路，每日行六十里，實際多至百里。兵士負擔極重，每人背二百五十發至三百發子彈，機關槍大砲，都係自扛。（因無伙子）沿途全無農民運動，加以反動派的宣傳（楊如軒事先通電各縣，說我們是北軍實行公妻共產）所以沿途農民聞風而逃。食物與飲料全買不到。甚至終日難得一粥。渴則飲田溝污水，以故兵士病死極多，沿途倒斃者絡繹不絕。同時軍隊中多無軍醫，衛生處等的組織，無法救治。加以宣傳工作極壞，兵士全不明此次暴動的意義，因此軍心大為動搖，逃走極多。僅行軍三日，實力損失已在三分之一以上，遺棄子彈將近半數，迫擊砲完全丟盡，大砲亦丟了幾尊，逃跑及病死的兵士將近四千。（二十軍最壞，軍隊紀律亦極壞，放槍拉夫等事隨時都有）。

第十師亦於到達進賢時，將我們在該師之主力范進同志團（三十團）解決，開到浙江去我南京政府收編去了。原來參謀團決定第十師走極左翼，與中路相距近百里，因此無法監視。

在臨川駐了三天，對外及軍隊的宣傳工作方才開始（前委才決定許多宣傳工作的計劃）在軍隊的黨的組織，和軍隊本身都有相當的整理，所以從臨川到瑞金二十日中情形比較好，行軍亦較緩（每日平均約五十里）兵士可多休息，天氣亦較涼快。但是沿途農民因受A B團的宣傳，對我們更加仇視，數日不見一人。譬如宜黃縣城原有近二萬人口，等我們到時，全城僅留有四十八個六十歲左右的男女。（在我們未到前曾經土匪騷擾）因病落伍兵士常被農民慘殺。過石城後才比較好些。

到臨川時因為二十軍十一軍的參謀都逃跑了，原定軍事計劃，有完全洩漏的危險，所以決定到瑞金後，改道經汀杭取東江。

將到瑞金時得探報，已有敵人，遂決定攻擊瑞金的計劃，在離瑞金三十里之王田市與敵人（錢大鈞部）接觸，僅三小時擊破敵人三團，我軍亦傷亡六百餘人，遂取得瑞金。

在瑞金得到敵人許多文件，方知敵人攻擊我之計劃，並有優勢之敵人在會昌，錢大鈞黃紹雄兩部約計十八團。遂改變計劃先攻破會昌之敵，然後折回瑞金，再經道汀杭取潮汕，因恐會昌之敵不破，敵人可以隨時襲擊我之後方。同時過會昌經尋鄔取東江山路很多，給養極為困難（據以後調查並不如是）故不得不先攻會昌再折閩南而取東江。

會昌之戰極激烈，將錢大鈞之主力完全摧破（錢軍力約一萬人，敗後僅收集二千餘人）我軍亦傷亡八百人，黃紹雄的損失極少。

因戰事及軍隊迂迴往返的關係，在瑞金停留約一星期之久，（前委在這一个星期中開過幾次會議，一切政策都有很大的改變）始到汀州。

C，由汀州至汕頭

在汀州時關於取東江的計劃有詳細的討論。當時有兩方面的意見：一，主張以主力軍由三河壩經松口取梅縣，再經興寧五華取惠州，以小部分軍力（至多兩團）趨潮汕，蓋料敵人恐慌已極，潮汕空虛，可以不戰而取。並且經潮汕再取興寧五華攻惠州，過於迂緩，敵人有集中兵力攻擊我之可能。一，主張以主力取潮汕，留一部分兵力於三河監視梅縣之敵，再經揭陽出興寧五華取惠州。蓋恐敵人死守，潮汕不得，便難取得外面的接濟。恩來希夷均主前說，俄顧問與賀電伯承

等均主後說。同時一般軍官長期行軍之後，均欲得地休息，多贊成後說，遂照後說意見決定。自上杭至潮汕，沿途毫無戰事，到汕頭時敵人已退二日。

D，湯坑之戰與潮汕失守

原定到潮汕的第二日即向揭陽出發，但因籌取開拔費的關係，在潮汕停留三日始出發。當時二十五師留在三河，二十軍第三師留守潮汕，因此出發前方者僅二十四師及二十軍之第一第二兩師，共計不夠六千戰鬪兵。

當時敵人已到達湯坑，總計兵力五師以上約一萬五千人，三倍於我。在分水湯坑之間激戰三晝夜，我軍傷亡過多（二十四師之下級幹部傷亡殆盡，二十軍亦死團長二人）無兵補充，遂不得不下令退却，同時敵人以一部兵力攻潮州，以海軍攻汕頭，汕頭之敵雖被擊退，潮州竟失守。於是不得不併汕頭放棄。

九月三十日晚二時，遂決定放棄潮汕退海陸豐。革命委員會到普寧之流沙兩日始與軍隊會合，但是在流沙之西十里便有敵人截擊，遂潰敗不可收拾，當時二十軍之兩師已過前方，僅二十四師在後面，退至甲子港時收集僅九百餘人，現尚駐在陸豐一帶，二十軍將到陸豐時，遂被陳濟棠軍繳械。留在三河壩之二十五師，曾大敗敵人，亦已傷亡過甚。向和平方面退却。現在尚余二千餘人，槍枝約千余支。

(三) 政權的組織

一，革命委員會的組織

在暴動之前，決定在原則上須建立一個無產階級領導的工農小資產階級民主革命政權，實際上便是組織一以C P佔多數的與國民黨左

派的聯合政權。名義上使用中国国民党革命委員會，以「繼承国民党正統」來号召，反對寧漢政府。暴動之翌日即由中国国民党各省黨部及特別市，海外黨部代表聯席會議的名義，產生革命委員會。

關於革命委員會的人選，經過一次的討論，主要的爭點，便是關於張發奎的問題，在暴動之初，對張發奎的態度已有不同的意見，就是暴動的決定不必問張的態度，和必須拉攏張始能暴動。最後的決定雖然是不管張的態度如何，由我們直接來幹。但是在許多事實上，還是表現許多妥協敷衍張的政策。如暴動的第二日還由賀葉分電告張，並表示歡迎他來南昌，同時並用民衆团体名義電張歡迎，在宣伝上還不大忌「擁護張總指揮的口号」。（這些都未經前委會正式的決定，在當時也沒有同志正式提出反對的意見）到討論革命委員會人選時特立平山同志極力主張湏加入張，恩來立三主張張不應加入，但沒有力爭，代湏無甚可否。所以結果張竟為主席團之一，而黃琪翔朱暉日亦列名革命委員會之中。

到瑞金後得到上海報紙，方知不但張發奎等已經鮮明旗幟反共，即所謂各省左派份子，亦完全投降於武漢政府，而武漢政府又實際上投降了蔣介石，同時各省軍閥都用国民党名義封閉工會、農會，殘殺工農群眾，因此国民党名義已為工農群眾所唾棄，所以聯合國国民党左派，繼承国民党正統已從事實上證明是當時機會主義的幻夢。因此前委會議決定，對於政權的性質，湏根本改變應該建立以無產階級領導的工農政權，不過在工農政權之下湏有聯合貧苦小資產階級的政策，實際上便是工農份子佔多數和C.P.佔多數的政府。同時決定鄉村政權應完全屬於農民，並湏以貧民為中心，城市政權，工人湏佔絕對的多數

，舉政權，工農分子應佔絕對的多數。

到汀州後，又決定名義上仍沿用国民政府，方可以應付外交，免帝國主義過分的干涉。（這是表現當時對於帝國主義過分的恐懼）。同時並決定以平山同志為委員長，而把陳友仁等都加入国民政府常務委員之中。雖然加入了許多工農份子，如順章，荷波，兆徵……同志等，然實際上幾成對原定的政策的敷衍弁法，因為除兆徵外都僅是空銜的政府委員。

（四）土地革命的政綱

在九江會議時，對土地革命的政綱已有不同的意見，立三代英主張湏提出沒收大地主土地的政綱為暴動的目的，因為南昌暴動的主要意義，就是要繼續沒收土地的鬥爭，實行土地革命。中夏平山反對提出沒收大地主土地的政綱，謂恐因此惹起反動勢力更加聯合的攻擊，和軍隊內部分化。爭論極烈，當日會議無從決定（兩方人數一樣），只決定報告中央徵可否？翌日恩來到潯，始伝中央的意見應該以土地革命為主要的口号，方得最後的決定。關於土地政綱的第二次討論，是在南昌暴動以後，農工委員會提出農民解放條例中，有「沒收二百畝以上大地主土地」一條，當時會議上有許多不同的意見：或以為二百畝的限制還是太低，主張沒收三百畝到五百畝以上的土地；或主張實行武漢議決後擱置之土地政綱，「肥田五十畝，瘠田一百畝」。甚至還有主張全不提出者。最後代英同志說：「我們這次八一革命就是要實現土地革命，所以我們決定了土地政綱，在沿途就要開始實行。只要真能實行，就是沒收兩百畝以上的大地主都是好的」。因此遂照原案通過了。

此項政綱決定後許多同志都很懷疑，沿途材到在軍隊中的廣東農民討論，有一個農民很痛快的答覆說：「如果是沒收二百畝以上的大地主，便是耕者無其田」，因為在廣東兩百畝以上的大地主便是很少，除掉許多公田以外。這一句話把許多同志的腦筋都驚醒了，因此，到瑞金後前委會議遂決定改「沒收二百畝以上的大地主的土地」為「沒收土地」不加畝數的限制。廢棄原有農民解放條例，另提出一修正條例。

第三次的討論係在上杭討論國民政府的政綱時，當時多數同志的意見都是主張全部沒收，因為覺到農民暴動起來了，不但二百畝以上地主的土地會實行沒收，就是二十畝以內的自耕農都會沒收，甚至平均佃權，湖南許多地方的農民對土地的処置便是前例，我們政府當然不能因為他超過了土地政綱限制和侵犯了小資產階級的利益便壓抑他們。所以應根本提出「沒收土地」和「耕者有其田」的口號。至於拉攏小地主的方法，可用其他的政策，如小地主的土地沒收後由國家發給一種有息不還本的債券等。特立的意見，对小地主仍當有相當的保障，所以主張改為沒收五十畝以上的大地主。因為多數的意見都是主張全部沒收，所以當時的決定還是「沒收土地，耕者有其田」。到第二日，廣東省委來了一份詳細的政綱，對土地問題，是「沒收三十畝至五十畝以上的土地」對於依靠田租為生活者不沒收，並已經在各地宣傳。因此，特立再召集會議，遂照特立的意見「沒收五十畝以上的大地主的土地」通過了。

(五) 勞動保護政策

在暴動之前後，很少注意到工人問題，直到瑞金以後，前委會才

討論一次關於勞動保護的政綱，結果，由農工委員會提出一勞動保護暫行條例，僅九條：「內面規定產業工人八小時工作制，手工業工人每日十小時工作，因公傷亡之賠償，和疾病死亡的撫恤，失業保險及童工女工的保護，產前產後的八星期休息等，条文很簡略，也未經過嚴重的討論便通過了。」

(六) 財政政策

自南昌暴動後，革命委員會成立日曾討論到財政政策的問題。當時意見在原則上幾乎一致，就是要根本改變以前軍閥的財政政策。將財政的負擔從貧苦的工農身上轉移到富有階級。並決定即時廢除厘金，及其他苛捐雜稅（這一點當時已有反對的意見）。到了臨川以後，軍餉一天天困難起來（因紙幣不能用）急須設法籌升現金。因此想起關於財政政策的大討論，總括起來有兩種意見：一，主張沿用旧的政策，就是每到一城，即行提款，派款，借款等，實際上就是利用一般劣紳土豪來籌款。這種政策的結果，自然是剝削到一般貧苦的工農小商人身上，大商劣紳反可從中漁利；一，主張完全拋棄旧的方法，目前的政策，應該以徵免（如徵免地主的糧食）沒收（沒收劣紳反動派等的財產），和對土豪劣紳的罰款等。平山伯渠等都主張前一個意見，立三，特立，代英，恩來等都主張後一個意見。這兩個意見当然是很明顯的，如果我們採用前一個政策，不單如軍閥籌餉無異，並且要動搖我們的根本政策（如建立工農政權，鎮壓土豪劣紳等）。所以在會議上雖然有爭論，因前一說的理由不充足，自然是決定採用新的財政政策。但是到了實行的時候，却又發生問題了。因為在贛東一帶全無農民運動，誰是大地主和土豪劣紳很難於調查，而旧的方法確可

以籌到少數的現金。因此從臨川到瑞金籌款方法極為混亂。如是平山同志得出一個原則，「只要有錢，不問政策。」到汀州時因為商會承認籌款，所以對於懲弁土豪劣紳都主張放棄了。（平山曾兩次写信給我，要我緩提土豪劣紳）但是結果上了一個很大的當，原來汀州商會承認三天內繳款六萬元，遂讓商會在城鄉大派款，連十畝以內的自耕農及很小的雜貨店都派他們十元八元不等，到是十萬元以上家產的僅出三五百元。這樣搜索的結果，三日僅得二万余元，並且鬧得滿城風雨。因此革命委員會只討論一次，立三特立等極力批評這種政策的不當，遂又決定完全取消旧的方法，採用新的政策。遂在汀州大捉豪紳，實行沒收與罰款，並發還許多貧苦農工的已出的派款，僅二日，即得四万余元。如是決定到廣東後全用新的政策。並組織「戰時經濟委員會」來管理一切。但是到了潮汕，竟又完全放棄了。當時平山同志提出兩個理由：第一，大規模的徵發沒收恐惹起帝國主義的藉口干涉；第二，潮汕是國民政府所在地，大規模的徵發沒收的結果，將是商業全停，秩序混亂，使反動派得以擴大宣傳，特立同志為第一種理由所動搖，恩來為第二種理由所動搖，如是財政政策一如（仍）舊貫，戰時經濟委員會便從此天殤了。

（七）鎮壓反動派

在革命委員會之下設立政治保衛處，專為鎮壓反動的機關，並決定對於土豪劣紳等反動派採用嚴厲鎮壓的政策。開始在贛東一帶因無農民運動，幾乎無法進行。僅在馭前，廣昌，平山市，瑞金，會昌等處殺了三十幾個土豪劣紳，和幾個A B團的份子。到汀州殺了四個劣紳。在當時準備到廣東後大規模的屠殺反動派，但是結果僅在潮州殺

了三人，大埔四人，汕頭十二人。原定的政策竟未能實現。有幾個主要的原因：第一，重要的反動份子已聞風先逃無法搜捕；第二，潮汕以東農民運動極弱，主持同志的觀念極為糊塗。如在大埔要當地同志開一反動派的名單，以便按名拘捕，他們却在名單上註記：「某人應以徒刑五月，三月，或無期徒刑等」其他如三河壩等地完全沒有農協的組織，更無法拘捕；第三，我們主觀上放棄鎮壓反動派的政策，如在汀州，潮汕時，平山幾次和我說要緩弁反動派，徐光英同志，就汕頭公安局時，反動派還沒有開始懲弁，反先捉豪亂搶劫的人三名槍斃了。有一個海員工友看見了，馬上說「這是蔣介石第三的軍隊。」到潮汕失守時，牢內還關有幾十個反動派（多半是工會送來的）竟無法殺他（晚上不能放槍，又沒有刀子）。反動軍隊到，自然馬上出來，更利害的反動了。（汕頭工會也極弱，有這個工會捉來，那個工會要求（強迫）要保，後來要總工會審查一張名單來，弄了五天還無結果）。

（八）宣傳工作

在革委會之下，設立一宣傳委員會，專管宣傳工作，同時又設立了總政治部，管軍隊內部的宣傳工作。然而此次的宣傳工作，却做得壞，宣傳的口號，政策的錯誤，這是由於總的政策的錯誤，當然不能歸究於宣傳工作，但是連八一革命的意義，不但是沒有深入群眾，就是兩軍的士兵亦不明白，二十軍的兵士沿途騷擾農民拉夫，拿物，甚至奸淫的事都發生過。就是十一軍的兵士直到失敗後還說：「四軍十一軍本是合一的，就是葉挺弄壞的」。這都是因為宣傳工作沒有深入兵士的原故。

（九）贛粵工農運動和暴動

江西黨的組織極弱，工農運動當然不好，贛東除臨川，寧都有特支組織外，其餘所經各地毫無組織。完全沒有農民運動。反動的A B團的勢力却很大，所以在贛東一帶不单是不能得到農民的幫助，並且受了很多的阻障。

沿途向兵士宣傳廣東農民運動極好，只要到了廣東，各縣的農民，一定可以馬上暴動起來，至於夫子糧食等當然毫無困難。不但是一般兵士都很相信，所有的同志都是這樣想。但是一進廣東界，却使人大失所望，農民對軍隊的情形還不如福建，到了大埔已經有工農討逆軍的組織。並且準備暴動已經兩三月之久，但是只有很弱的極幼稚的軍事技術的佈置，全未注意煽起群眾的工作，更未注意群眾的組織。以至我們軍隊到了，連拘捕反動派的工作都不敢做。軍隊開拔時要他們召集一百農民組織農民軍，保衛縣政權，結果僅得五十餘人。

三河壩在軍事上極為重要，但是當地全無農會的組織。松口為工農討逆軍第八團團部所在地，僅有七十幾個農民，農民群眾亦未起來。我們交了一百五十支槍給他，結果我不着農民來拿。

我們想像中的汕頭，一定工人運動很發展，工人的鬭爭一定很利害，因為在省港罷工時經過很長期的鬭爭。但是到了汕頭，表現得非常之弱。我們預備將以前的警察完全取消，因為完全是壓迫階級的工具，組織五百工人義勇隊來代替他。經過三天的号召僅得七十餘人，並且都不甚願意，因為餉項睡食等等都不如意。可見群眾的階級覺悟都非常之弱。

在汕頭亦經過數月的暴動準備，但是也因為只是注意軍事技術的

準備，不知道對群眾政治的煽動，所以結果群眾不能起來。

潮汕以東一帶農民運動較好，農民羣衆經過長期的鬭爭，暴動軍事的準備亦較完善，（仍是欠乏對群眾政治的煽動和組織）群眾亦自動起來參加，所以在我們軍隊未到以前，農民已將海陸豐兩城佔領了。我們到時，潮陽，揭陽的農民也佔了縣城，普寧四鄉的農民都起來暴動將縣城圍住了，反動派死守縣城，有槍八百餘支，機關槍大砲都有。農民圍攻不下，派人要軍隊援助，當時派了十一軍一營人去助攻，只數小時便攻破。本可將普寧所有土豪、聚而誅盡，但是這一營長（同志）在攻破城時，不讓農民進城，（因恐農民殺戮太多），同時並宣佈「革命軍是不擾民的軍隊，決不會隨便屠殺的。」到軍隊撤退時，農民亦不敢殺了。因負責同志這樣想，「軍隊是我們自己的軍隊，他不於破城時大殺反動派，或者是団体預定的政策。」

只有潮陽方同志帶的農民於破城之後大殺反動派，農民異常歡迎他。浮陽農民與地主激戰數日，後經軍隊的幫助將民團繳械後，農民將地主大燒殺了一次。但這些地方的反動派尚未完全肅清，而軍事上已完全失敗了。於是各地的農民都只好仍舊上山去。

（十）黨的組織

八一革命表面上看起來，似乎完全在黨的指導之下，實際上不過是許多C P份子的個人指導，最後幾乎變成平山同志的個人指導。

中央的八七緊急會議，雖然是黨的政策與組織脫離機會主義進入波爾失威克化的一大關鍵，但是對於八一革命以後的政策未能充分注意。為國民黨問題，政權問題，財政與經濟政策，外交政策，均未有明確的決定。至於指導的技術上，更是疏忽，我們在前敵的同志，直

到了汕頭後，才知道有八七緊急會議的這回事。行軍兩月，簡直成了野人，不單是不知道黨的情形，並且連全國大的政治狀況都不知道。蔣介石下野，我們到汀州看見上海的申報才知道。

前委的組織原照中央命令，沒有平山同志，但是當時平山在政治負了很大的責任，中央並未將他撤換，所以前委商量的結果，只好要平山參加前委會議。到南昌時前委組織比較完善，後來革委成立，都加入到革委去了。並且都是担负很繁重的工作，各項技術工作人員也取消了。於是前委變成了革命委員會的黨團。同時負責的幾個人，都是前後左右分途而走，很難集合一塊開會。因此除掉幾個重大根本政策以外，許多重要的問題都由負責同志隨意弁理，甚至違反已定的政策，也不能糾正或制裁。可以說前委本身組織非常之弱，在政治上，幾乎完全失掉了指導。譬如在汕頭與張發奎聯絡，和濫委陳炯明部為師旅長等事，有幾個參加前委的同志當時全不知道，直到香港才聽見說。

在革命內工作的約二百六十余人，內有一百八十余同志，但是到汀州才組織起來，開過兩次大會和幾次支部會。至於他們的工作，前委全未能加以管理和指導。

軍部方面的組織比較好，各種會議也比較的多，不過與前委的關係很壞，因為軍部在組織上是獨立的，就是一切政治的指導都須完全經過軍部，同時軍委亦很弱，所以黨的政治的方針很難深入到軍隊中的同志去。這是黨的組織上一個很大的弱點。

經過各地黨部的組織，都異常幼稚，並且充分表現機會主義。在贛東一帶不必說簡直全無黨的組織，就是在粵東一帶所有各地的黨部

，不過是一些共產份子的集團，全不是群眾的鬭爭的組織。有些地方曾極力做暴動的準備，但只注意軍事技術，全不深入到群眾中去。這組織上的機會主義，實在是黨的根本的危險。

(十一) 結論

八一革命在客觀上是中国革命進到一個新的階段，就是工農階級直接奪取政權的開始，同時就是國民革命最後一個階段，土地革命的客觀。但是因為黨的政策深中機會主義之毒，不但是得到一個最後的失敗，並且把本來客觀上付予的意義都完全失掉而成為一種簡單的軍事投机。第一，國民黨在武漢反動屠殺工農以後，已成為群眾所唾棄已臭的屍體，所以八一革命應該是工農政權的開始，但是還死戀着已臭的屍體，好像要靠總理在天之靈來保佑一樣。革命委員會之中幾乎全數是C P，但是每次開會時還是要宣讀總理遺囑，想起來真好笑？到瑞金以後已經在原則上決定要建立工農政權了，便是還捨不得一塊國民政府的招牌，直到汕頭失守，才決定取消國民黨的名義和「白色恐怖」的旗子，這就是機關（會）主義在這裏作祟。第二，明知道八一革命的意義，主要的是土地革命，但是却提出沒收二百畝以上的大地主，這種「耕者無其田」的土地政綱，就是黨在第五次會以後所謂聯合小資產階級的結果。第三，可從對汪精衛的幻想中得着很大的教訓，但是却又迷恋於張發奎，到了潮汕張完全反動了，看見他到廣州掛了一塊反南京的假招牌，却又對他懸着很大的幻想。這完全是小資產階級依附強力的心理。第四，不敢屠殺土豪劣紳，反對徵發沒收的政策，却維持旧的秩序來裝璜國民政府的招牌，充分的表現是資產階級的政治。汕頭工人說「這是蔣介石第三的軍隊」，真是一點不錯

！第五，暴動是群眾創造的藝術，沒有群眾便無所謂暴動，但是我們在各地暴動，只有軍事的準備，完全沒有發動群眾，並且到準備暴動時，注全力於軍事組織，把原来的群眾組織都放棄了，所謂工農軍的暴動，不過是變像的軍事投機。第六，不去極力發展群眾，却認與陳炯明的余孽接洽及聯絡土匪等是重要工作。第七，軍事行動不與敵人作決死爭，却極力避免敵人的攻擊，這都是軍事上的機會主義。

這次八一革命的政治上的錯誤，可以說是黨的歷史上的機會主義的結晶，偉大的八一革命，完全被機會主義斷送了。當然軍事上雖然失敗了革命還在繼續高漲中，革命的主力工農群眾還在繼續奮鬥中，不過我們不深深領會這些教訓，我們還會繼續做斷送革命的罪人，同志們不要忘記了八一革命中所得的寶貴的教訓。

C 張太雷報告——在十月十五日南方局省委聯席會議席上——「八一事件」之經過失敗原因及其出路
這個報告分開幾方面說：

(一) 政策決定之經過

我們首先說明向中央決定南昌八一暴動，是決定在四省秋收暴動以後，此時解枱要以農民為主力，去進行土地革命。並未絲毫依賴軍事力量。後來南昌客觀上容許我們動作，中央決定要動。但只認定南昌暴動是四省暴動中的一部份，僅僅是土地革命的一個幫助。希望軍隊到廣東來，能够與廣東農民暴動打成一片，絕不是希望單純軍事的勝利，因為這是沒有意思的。在南昌開會的時候，平山同志主張幹，但他主張幹的原因說是：賀龍主張葉挺也同意幹，故他也主張幹，這

完全是軍事冒險的運動。絕不是如中央決定去幹的政策一樣。當時秋白把南昌的決議由潯帶到漢口，中央已決定對張發奎的態度，如張不與汪精衛聯絡則到東江之後始解決之，否則在潯便解決他。故贊成南昌的決定，並派恩來去主持，同時國際亦決定要幹，內容詳細我雖不知，但決定要幹我是知道的。後中央又派國濤去，意思是要他去鼓勵同志更堅決執行中央的政策，不料國濤假借聖旨，說國際不主張幹，他亦極力反對幹，此時反而平山主張動成為擁護新政策的一個人，國濤這不僅損失個人的信仰，而且是損失中央的威信，因為他是中央派去的。故此國濤的行動，實處受處分。因為這樣結果致使這次動成為平山所領導，自然這個運動也變成了軍事的投機。

(二) 政治上的錯誤

這次軍行所至，與土地革命毫無關係，未曾幫助農民有蓬蓬勃勃的鬭爭，沿途只知道叫軍士怎樣守紀律不擾民。可以說這次我們的軍隊，不是什麼革命軍，只算是王者之師秋毫無犯。不准軍士搶土豪劣紳地主之財產，甚至雞犬亦不能擅取。寧願餓肚，還算在彭湃鄉村中殺了幾十人。我們軍隊到的地方，並沒到鄉村中去騷亂，殺戮土劣，聞在汀州捉了十人，亦只勒索數萬元了事。到了汕頭，更是沉寂，其情形聞之便要下淚，甚甚宣傳，籌款打反動派，一概沒有甚話，聞說曾招（召）集了一個大會，標語传单不多，見警察就跑了，我們不知打（把）工農份子去代替，反去我回旧的，始有人站崗，至兵艦陸戰隊上岸那天，警察竟為內應，我們對警察還這樣不忍殺戮，甚而至公安局的名義都不肯改為政治保衛團，這雖然很小的事情，亦足見他們保守觀念太深。

各地農民亦沒有得到軍隊的幫助，潮汕農民亦可動，潮陽農民自動起來，亦只派軍隊甚少去援助，普寧城派了一營人，攻西城，軍隊竟從防軍之要求，不准農民入城大殺土劣。農民是非常不滿意，覺得我們的軍隊與其他軍隊沒有甚大分別，大家都把敵人打了克服廣州，甚大問題都可解決了遂不注意怎樣趁軍隊力量所及的地方去負起幫土地革命進行之任務，這與國民黨劃分軍政時期憲政時期的觀念錯誤是一樣的。

(三) 軍事上的錯誤

軍事上的錯誤亦是跟着政治上的錯誤而來的，譬如國燾不主張在南昌動作，因為是對張發奎有許多幻想。就是臨走的前夜亦與張發奎作很長的談話，而且說還有希望。軍事上的錯誤在南昌動作開始的時候就有，就是對蔡廷楷部，過於相信，以為他不會背叛，遲遲不解決他，致被中途逃走，同時影響到二十軍。不然，多了幾千兵或不至有這樣利害的失敗，同時軍事計劃因為想急取廣州，所以行軍是很快的，沿途拋棄槍枝大砲無數，死人亦多，然後至會昌又折回，不由筠門嶺入，以為給養困難，其實並不是事實。裕葉去平遠回來報告，筠門嶺一帶給養都可能的，這又當進不進的貽誤時機，使敵人能够集中。其次軍隊中的偵探工作做得不好，敵軍作戰計劃與人數完全不知，湯坑之後仍是亂摸的，還有就是主力軍隊不集中，二十五師竟調去三河堤遂為敵人擊斷不能援救。總之，這次失敗，是軍隊行動與東江農民沒有聯絡，鼓起土地革命之高潮，與農民暴動打成一片。

(四) 我們應有之認識

此次的失敗，很明白的告訴我們，單純軍事的投機，沒有喚起廣

大農民起來，必然失敗的。但經過這次之後，有些人根本會懷疑到農民，以為農民沒有力量，這個錯誤觀念，我們應該嚴厲反對的。

(五) 目前的方針

目前工作方針，與前大不相同的，就是以前還有些妥協存在：一，以前五十畝以下土地不沒收的，這實在是土地革命的障礙，以後便一切地主（小地主在內）的土地都要一概沒收，澈底的幹去；二，以前還是用國民黨旗幟去号召，以後便不要了，改用紅旗。以前只限於宣傳蘇維埃，以後便要真正建設工農兵代表會。表面上似乎與前所差無幾，實際已大大不同，就在換紅旗一點看來，已表現出我們的堅決。

我們現在要放胆去幹，不應該像以前太規矩，要平民式的幹，不要有仁慈，打破好人的觀念，對土豪應該亂殺，絕對不要恐怕冤枉了。我們必須接近新的精神，拋棄一切旧有的觀念，甚至以前是很好。根據此政策，我們的工作是：

一，二十五師已退彰州，約二千余人，二十四師已到海陸豐一帶，約有千把人，賀部師長已叛，但聞兵士脫離者數百人，我們現在要決定他們去做政治的流氓，不應該過去只注重掠奪政治經濟的中心，他們每到一地，便要殺土豪劣紳，幫助農民起來便要組織工農政府，擴大宣傳，我們不是希望一定要這個政權能够穩固很久。

二，軍隊一律改工農革命軍，指揮在參謀團，實則直接受南方局指揮，不致再成為單純軍事投機行動，旗幟改紅旗。

三，各地且仍應積極準備，有機會便起來。

四，革命委員會要改組，權屬中央，名單更要中央決定。至各省要不要革委，由中央決定。至將來革委之產生，或可召集全國工農兵

代表會，或某一種形式，其余各條，在目前工作綱領上面已有寫出。現不重述。我們有個問題，就是以後是否還有希望，革命前途是否高潮？我們可以肯定說是高潮的，有希望的。我們從主觀方面說，自軍事失利後，海陸豐農民仍繼續的奮鬥，打賀部叛軍，十四日廣州海員示威大運動，自動奪取工會，打工賊，至海南農民佔據五鼎，組織政府，現仍有佔據全島的希望，武漢湘農民仍在奮鬥中，再從敵人方面說，全國已入混戰局面，馮張之事，晉奉之事，唐生智與南京之衝突已明顯，周鳳岐何應欽亦交惡曰甚，李張因我軍失利，而成李張黃鼎足而三之勢，日在準備合併之中。我們的失利（敗），並未促成敵人的團結，反促成敵人的衝突。反一方面說，我們因這次失敗使我們不再幻想單純的軍事行動，而知道只有靠自己的力量，假使這次我們勝利了，前途可否樂觀還是懷疑的。因同志中多仍充滿旧的觀念，党的力量又弱，同志中竟有爭領袖的表現，勝利了恐也不是革命的勝利。

總之，我們得到了此次教訓，必須拋棄過去的錯誤觀念，澈底執行党的新政策，這樣的勝利才是真正的勝利。

D 張國濤報告

此次潮汕可痛之失敗消息，諒兄等已於報章中略得一二，弟與立三，代英，伯承，伯渠，玉章，賀龍，彭湃，平山等均於七號來陸豐等處，陸續逃至香港，太雷，倚園諸兄先第一日起程返港，但至今未到，不知是否遇險，恩來希夷諸兄尚在軍中。二十五師原在三河壩，現向閩邊退却，二十軍及二十四師剩千人現在陸豐。欲知詳情說來話

「八·一南昌暴動」に關する四文書

長。回憶弟奉命赴潯時，我軍已集中南昌，當即趕赴南昌與前委同志會商，諸同志都主張立即與張發奎分裂，彼時箭已在弦上不得不發。惟發動為一事，發動後如何進行又為一事，主張發動者，內有少數同志多不明白爭領導權的意義，然集吾黨國民黨工作人員及政治工作人員於一處（吾党政客及平山等）雖主發動實在無出路之心理最多，可謂之左派投机主義。故彼時軍中同志，亦尚無與張分裂之決心，政客們，更是不知道發動之後如何進行，應用何種政策，弟名之為「毫無爭奪政權之準備」，彼時革命委員會的組織與解決農民條例等，都是倉卒弄成的。停留南昌共四日，僅僅組織了一個革命委員會，發佈了一二篇宣言，毫無顯著的政治表現。政治工作人員如章伯鈞之流，都是藉軍隊掩護出海逃生之心理。出發南昌軍事上却有十師之變，××范蠡同志等死之，假使彼時我們要解決十師，並非不可能，徒以無爭奪政權之準備，遂為人所亮。出發南昌時，現突固有許多困難，最困難者為夫役欠乏，故從南昌到撫州一路甚為狼狽，大破（砲！）喪失殆盡，機關槍亦失掉不少，槍枝二千枝，子彈更不知其數。行軍毫無精神，從軍官以至兵士不知為什麼到廣東去，同時同志中有幾件表現：一，實在沒有法子我們就上山；二，我們在這種無法生存，跟軍隊到廣東去再說；三，反對汪精衛等的宣傳並不熱烈；四，對於革命認識不清，這些都代表逃亡失敗的現狀，南昌起義是對的，可是在起義中党的作用實在很少，在軍事上政治上都毫無準備，雖然平山常說中央歷來是取讓步政策，只有南昌八一革命是真正領導權，開中國党中國革命的新紀元，可与十月革命並稱，但是事實上証明其為左的投机無疑。如此無爭奪政權之準備，亦不可不謂吾党歷來之遺毒。

從撫州至瑞金，一路只是簡單的行軍狀況。在南昌時，我們得到七十萬紙票，十萬現洋，可是紙票不好用，積極方面無所表現，消極方面因行軍不易得到快子及糧，故亦不能說是有紀律的軍隊。拉夫者有之，搶人雞子者有之而尤以二十軍為甚。及到瑞金會昌幸而戰勝錢大鈞，此時我軍戰鬥兵只剩八千人，出發時共有二萬一千人，十師變去掉五千人，沿路疾病落伍及逃亡者不下七千人，瑞金會昌之役損失千人。到瑞金時政治意識始稍明顯，吾人所討論者：一，政府的組織形式；二，政府的政策——土地革命；三，利用國民黨旗幟至何程度；四，財政政策；五，軍隊的補充問題。然會昌戰勝後，吾人不走會昌出尋鄔到粵之平遠，反折而走閩之汀州上杭，實為最大之錯誤。

政治上同志對於土地革命雖積極宣傳，然土地革命應如何進行，則極少明瞭者，政權形式則尚欲利用國民黨旗幟，故主張果市區鄉政府則建設工農佔百分之九十的政權，上級則主張利用國民政府名義，並主張用各省果市革命委員會名義以及以左派清黨的弁法改組國民黨，召集國民黨第三次代表大會，蓋欲與汪精衛等爭正統也。對於財政籌款方法，始終採挾於利用土劣攤派款項之旧式弁法之間，懲弁土劣尚未能堅決進行。從撫州到粵邊，一路毫無吾黨組織及工農勢力之可言。

吾人抵粵前以為廣東之工農必有相當之準備，乃事出意外，所經大埔三河壩，高陂留隍，潮州，汕頭等處，工農勢力均極弱，然吾人又不先於梅縣，興寧，五華佔潮汕之×背，而竟直下潮汕，敵人佔住梅縣，湯坑，豐順等處優勝形勢，我軍遂成為斧底游魚，馬得不敗。

湯坑之役，敵陳濟棠，徐景唐，薛岳，王俊等部約一萬五千人，我軍二十軍二十四師只五千人，敵黃紹雄部圍襲潮安，我只一團守，

二十五師又遠在三河壩，湯坑戰兩晝夜，我軍死傷二千人，敵死傷四千人，然終不能勝敵，潮安失守，如是二十軍二十四師既不能退饒平與二十五師聯絡，遂不得不倉卒退潮陽之閩埠走貴嶼，聚於普寧之流沙，及抵流沙開緊急會議，而又為敵所截擊，我軍遂一敗不可收拾，弟等即於是處四散逃至海邊，雇民船逃香港矣。

抵港後與省委會議，知粵局張李衝突在即，吾人仍須集中工農勢力爭取政權，集中地點：二十五師在閩邊之韶安，二十四師及海陸豐之農民集中海陸豐，江西農民及琼崖農軍均設法集中，以及仍用革命委員會名義，軍隊用工農革命軍名義，廢止國民革命軍名目，積極發展工農鬥爭等；革委預備立即發布宣言。總之，此次運動之中，同志死者極多，同志忠實能奮鬥者亦最多，然十一軍尚不能說是C P軍或工農軍，只能說包括很多C P份子之有紀律的國民黨軍，二十軍只能說是表同情於我們之旧式軍，革命委員會則甚複雜，黨的組織極鬆懈，黨亦無職權，軍事上政治上均甚幼稚，毫無奪取政權之準備，如此潰敗，實堪痛心，中局對此次事宜有表示，同志如賀龍伯渠等均欲赴俄，請中央送之往，弟不日即返滬，報告一切，對於八月七日之決議及告同志書已略知一二，弟完全擁護，並欲日內回滬，面受處罰，船即開，甚急。並致黨札！

國壽 十月九日